

<教育実践研究>

鳥取大学附属図書館のラーニング・commons

津村光洋

Learning Commons in Tottori University Library

TSUMURA Mitsuhiro

キーワード：ラーニング・commons、インフォメーション・commons、大学図書館

Keywords: Learning Commons, Information Commons, University Library

はじめに

鳥取大学附属図書館は鳥取キャンパスの中央図書館、米子キャンパスの医学図書館からなり、中央図書館は地域学部、工学部、農学部の約6000名の学生・教職員を対象に教育・研究活動の支援を行っている。中央図書館では2009年7月から2010年3月にかけて耐震改修工事を行ったが、その際新たにラーニング・commonsのスペースを設置し、2010年4月の新装オープンと同時に利用を開始した。本稿では鳥取大学のラーニング・commonsについて、これまでのラーニング・commonsをめぐる議論や現在の利用状況を踏まえながら、鳥取大学固有のラーニング・commonsの意義について検討してみたい。

1. 鳥取大学附属図書館にオープンしたラーニング・commons

(1) ラーニング・commonsについて

ラーニング・commonsはその前身であるインフォメーション・commonsも含めて、1990年代から大学図書館で設置されるようになった新しい学習スペースで、その後世界的に設置する大学が増えている。日本でも、2000年代以降設置する大学が増え、とくに国立大学では、ここ数年の間に改修工事を行った多くの大学図書館、例えば名古屋大学、お茶の水女子大学、大阪大学、広島大学、金沢大学、新潟大学などの図書館でラーニング・commonsが設置されている。

一般的に、ラーニング・commonsは、1990年代に北米で設置されはじめたインフォメーション・commonsをさらに発展させたものとされる。ラーニング・commonsやインフォメーション・commonsについては国外・国内でかなりの数の論文が書かれ議論がなされているが、どちらかというとな煩瑣な説明が多く、シンプルで分かりやすい定義がないので、図書館関係者以外にはなかなか理解されていないのが現状である。

比較的分かりやすいものとして、例えば、ベネットはインフォメーション・commonsについて、この分野の先駆であるビーグルらの議論を踏まえ、「物理的、電子的、人的資源の脈絡の中に存在する、ネットワークのアクセスポイントや関連するITツールの一環であり、それが学習支援の中で組織される」、ラーニング・commonsについては、インフォメーション・commonsの資源が「大学の他の部署による学習の主導(イニシアティブ)との協働の中で組織される、あるいは共同のプロセスを経て生まれた学習成果と提携したとき」に生じるもの、と説明している(Bennett, 2008)。

つまり、建物・スペースや図書資料などの物理的環境、ネットワークなどの電子的な環境、レファレンスやIT相談、その他学内の学生対象の人的支援サービスを、学習支援を目的に従来のパソコン・ルームなどよりも

統合的に提供しようとしているのがラーニング・コモンズの特徴である。

ラーニング・コモンズでは、個人学習からグループ学習まで多様な形の学習に対応できるように、アレンジが容易な可動式の机を設置したり、他とは仕切られたスペースを設けたり、会話や飲食に関する制限を緩やかにしている場合が多い。また、レファレンスや IT 相談のカウンター、さらに従来図書館や IT 部門以外で行われていたチュートリアル、論文の作成指導、授業科目の履修といった学生向けの学習支援サービスを行っている事例もある。海外では建物全体、あるいは図書館のいくつかのフロア全域をラーニング・コモンズとしているケースもあるが、日本では図書館の一区画をラーニング・コモンズにしているケースが多い。

(2) 鳥取大学附属図書館のラーニング・コモンズの概要

鳥取大学附属図書館では、耐震改修の基調構想の一つとして「今日の学習・教育・研究における多様な形態にも対応可能な、使用目的に応じた空間を提供すること」（高阪, 2010）を掲げ、ラーニング・コモンズの設置はこれに基づいたものといえる。また、山根（2009）は鳥取大学附属図書館の改修の意図を、図書館での学生の勉強パターンを次の 3 パターンに分けて説明している。

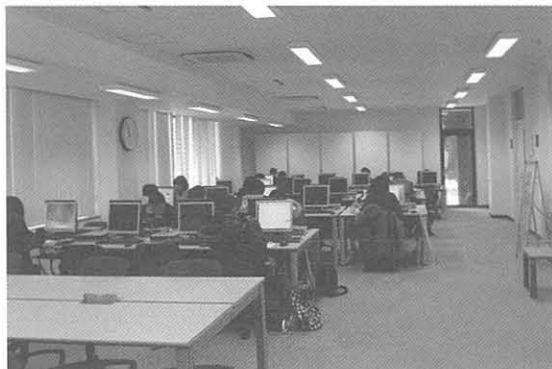
- (1) 1人で集中して勉強するため、なるべく部屋の隅に行く人
- (2) 友達数人で静かに勉強しているが、何か分からないことがあると互いに教えあうグループ
- (3) 共同で発表等をするためか、数人でにぎやかに話をしながら勉強をしているグループ

このうち、従来の図書館は (1) のような使い方をする人のための構造になっていたが、「今回の改修でこの 3 パターンの勉強が区分けできるように工夫している」と述べている。ラーニング・コモンズはこのうち (2) や (3) のパターンの利用者を想定したスペースといえる。

ラーニング・コモンズ内にはデスクトップ・パソコン 40 台を設置しており、学生は個人の ID とパスワードでインターネットを利用できる。ID のない学外者等も、カウンターで貸し出す IC カードによりパソコンを利用することができる。無線 LAN により、全域でノート・パソコンからのインターネットの利用も可能である。デスクトップ・パソコンのない席は 58 席あり、そのうち 36 席は飲食のできるリフレッシュ・コーナーにある。学内の LAN を通じて、パソコンから利用できるオンデマンド・プリンターが 2 台、IC 学生証への入金装置が 1 台ある。

また、改修前に視聴覚資料用のブースがあったスペースを利用して、ラーニング・コモンズ内にグループ学習室を 3 部屋設置した。このうち 2 部屋は最大 7 名、1 部屋は最大 12 名まで利用できる。

ペットボトルなど蓋付き飲み物については図書館の全域で利用可能であるのに加え、ラーニング・コモンズ内のリフレッシュ・コーナーのスペースに限って軽食も許可しており、ここに飲み物の自動販売機を 2 台設置している。



鳥取大学附属図書館のラーニング・コモンズ



リフレッシュ・コーナー

2. ラーニング・コモンズと図書館サービスの新しい方向性

(1) 日本のラーニング・コモンズに人的支援サービスは定着するか？

ラーニング・コモンズに関するこれまでの議論の中で強調されることが多かったのは、学生に対する人的な支援という側面である。これは、北米等の一部の大学図書館、例えばマサチューセッツ大学アマースト校などで行われている文書作成、学生相談、就職相談、個別指導、障害者技術支援のようなサービス(片山, 2008)を模して行われているものである。

例えば、筑波大学では専用の施設よりもむしろこうした人的サービスこそが重要であるという発想にたち、2008年から教室の1つを利用して学生チューターによる学習・生活全般の相談サービスをラーニング・コモンズと銘打って開始している(歳森, 2010)。また、上智大学やお茶の水女子大学附属図書館のラーニング・コモンズでは、その一角に設けたカウンターにおもに大学院生のスタッフを配置して、レポート・論文、レジュメ作成、プレゼンテーション指導等にあたらせている(杉本, 2010; 茂出木, 2008)。

しかしながら、こうしたサービスが大きく効果を上げたという例は、現在のところ日本国内では報告されていない。その理由は、日本の大学ではアメリカ等で一般的なライティングやチュートリアルといったサービスが、十分に馴染んでいないためと筆者は考える。また、現時点では日本のほとんどの図書館員に論文作成や学習指導といったノウハウがないため、カウンターでの対応を大学院生のアルバイト等に依存せざるを得ないし、利用する学生の側にも図書館でそうしたサービスが行われているという意識はない。こうした状況のなかで、北米などで実施されているサービスをそのまま日本に導入して定着させるのは難しいのではないかと。

筆者は2010年11月から12月にかけて、イギリスの大学図書館を見学した際、最近オープンした同種の施設が、学生に使いやすい学習スペースの提供にこだわって大きな成果を挙げている例を目にした。日本のラーニング・コモンズ担当者も、こうした人的サービスはあくまでも選択肢の一つとして考え、これにしばられずに学生のニーズに合わせたサービスを模索するべきではないだろうか。

(2) ラーニング・コモンズにおける利用者相互のコミュニケーションの可能性

山田(2010)はライティングセンターなどの学習支援があくまで個人に閉じた学習になるのに対し、むしろ学習とは「学習者間、また学習者と人工物のインタラクションによる知識の再構成」をすることであり、そうした学習を実現する場としてラーニング・コモンズの運営を行うことを提案している。山田がとりわけ重視しているのはグループ学習の支援である。

これに近い観点で、筆者が図書館で日常業務をしている立場からラーニング・コモンズの図書館サービスにおける革新的な点として注目したいのは、会話など利用者相互のコミュニケーションを許容している点である。そもそもラーニング・コモンズで会話ができることは、学生に多様な学習スペースを提供する中で派生的に生まれてきた要素であり、会話のできるスペースの提供自体がラーニング・コモンズの目的ではなかった。しかし、ラーニング・コモンズが往々にして学生に「図書館の中で話ができる場所」と解釈されるのは、図書館の中にそれが可能なスペースができたということのインパクトの大きさを物語っている。従来の図書館は基本的には、各々の利用者が希望する資料を提供し、それを各々で利用してもらう個人での利用を想定しており、グループでの利用や、利用者相互のコミュニケーションをサポートするという方向性は打ち出されてこなかった。

1990年代以降、大学図書館では電子ジャーナルやデータベースといった電子的な資料の占める割合が増大し、来館者の減少という危機に直面した。それを打開するために、利用者にとって居心地のよい空間を提供し、来館者の増加、長時間利用の促進を目指す、滞在型図書館という方向が打ち出された。例えば、2003年にリニューアルオープンした横浜国立大学の中央図書館などはこの方向性で改築を行い、これまでにない多数のグルー

ブ学習室や講演用ホール、イベント用ラウンジを設置して話題となった（立石，2010）。こうした施設は、従来の大学図書館にはなかった利用者相互のコミュニケーションを可能にする施設として注目に値する。しかし、図書館全体から見ると、これらの設備もあくまで付属施設といった色合いが強い。

これに対して、その後登場したラーニング・コモンズでは、この滞在型という発想からさらに発展して、自由に会話をし、飲食をしながら他の利用者との自由なコミュニケーションが許容され、しかもこの空間が従来の静かな閲覧スペースとともに、図書館における中心的なスペースの一つとなっているのである。このことは単に図書館のスペースの区分けの問題だけに止まらず、図書館のサービスの在り方そのものが変化しはじめていることの表れとも考えられる。つまり、ラーニング・コモンズには個々の利用者へのサービスだけでなく、グループ学習の支援により、学生相互、あるいは学生と教員、図書館員といったコミュニケーションをサポートし、促進してゆくという新しい図書館サービスの在り方が示唆されている。

3. 鳥取大学附属図書館のラーニング・コモンズの現状と今後

(1) 利用状況

鳥取大学のラーニング・コモンズにおける利用状況を把握するため、筆者は2010年12月16日から24日までの約1週間の平日に、利用形態ごとの学生数の調査を行った。因みに、12月は一年を通して言うと、ほぼ標準並みの落ちついた入館者数の月である（注）。

調査に際して、グループ学習室を除くラーニング・コモンズ内のスペースでデスクトップ・パソコンを利用している学生、それ以外の個人利用、グループ利用の学生の別に、平日の12時、15時、18時におけるそれぞれの利用学生数を調べた。また、個人・グループ利用両方を含めて、ラーニング・コモンズ内で利用されていたノートPCの台数も調査した。

調査の結果は別表1のとおりで、ほとんどの時間帯でデスクトップ・パソコンを使う学生、グループ利用、個人利用の順に多いという結果になった。この結果から、ラーニング・コモンズは、まずデスクトップ・パソコンを使いたい学生、次いでグループ利用をしたい学生に使われていると考えられる。昼休憩の始まる12時から夕方にかけての時間帯は、かなり多くの学生がラーニング・コモンズを利用して賑わっている印象を受けたが、グループ利用の学生の会話が、個人でデスクトップ・パソコンを利用する学生に邪魔にならないように、適度な静けさが保たれるような配慮が必要であろう。また、ノート・パソコンもこのスペースである程度利用されていることが分かった。

なお、「グループ利用」という言葉からは学生同士によるディスカッションやプレゼンといった形式の利用がイメージされがちだが、実際には、先に述べた山根による3つのパターン分けでいうと(2)の形態、つまり数名でかたまっただけが個人学習をしながら、必要に応じて会話する形態での利用が多かった。

ディスカッションやプレゼンという形での利用が行われているのは、ラーニング・コモンズ内のグループ学習室である。3つのグループ学習室は予約も可能で、学生の学習やサークルの集まりなどに非常によく利用されている。利用記録によると、例えば2010年の12月の平日は毎日少なくとも1グループ以上に利用されており、平均で1日あたり3.4グループ、多い日には7グループが利用していた。この利用の多さには、図書館という学部を越えたいわば公共の場所に、簡単な手続きで利用できる部屋があることも関係しているのではなかろうか。

鳥取大学附属図書館では2010年7月に、学内者を対象とした利用アンケートを行い、湖山キャンパスでは学生を中心に1950件の回答を得た（鳥取大学附属図書館，2010）。このアンケートによると、「個人での利用とグループの利用のどちらが多いですか」という問いに対し、1813件の回答中、「個人」が1411件、「グループ」が211件、「同じくらい」が191件と、グループ利用の比率はかなり低かった。また、図書館に望むこととして

「静かに勉強できる環境」を挙げた回答が97件とかなり多く、図書館がグループよりも従来のような静かな個人学習の場所として学生に認識されていることが分かった。

図書館側が提供する新しい学習スペースと、学生が実際に求めている環境との間に、ややズレが生じているようにも感じられるが、もっともこれは新装図書館が開館して数ヵ月後の調査結果で、学生自身がまだ新しい図書館の使い方に慣れていなかった可能性もある。「グループで利用する際の快適さ」については、1874件の回答のうち、「満足」304件、「やや満足」569件、「やや不満足」192件、「不満足」44件、「利用していない」765件という結果だった。「利用していない」を除いた回答のうち79パーセントが「満足」もしくは「やや満足」なので、ラーニング・コモンズを中心とするグループ学習スペースは、概ね学生に好評と考えてよいだろう。日頃のラーニング・コモンズの混み具合から考えても、今後学生自身が日々利用する中でこのスペースの使い方を見つけ出し、価値を高めてゆく可能性が十分にあると思われる。

別表1 2010年12月平日のラーニング・コモンズ利用状況

時刻	16日(木)			17日(金)			20日(月)			21日(火)			22日(水)			24日(金)		
	12:00	15:00	18:00	12:00	15:00	18:00	12:00	15:00	18:00	12:00	15:00	18:00	12:00	15:00	18:00	12:00	15:00	18:00
デスクトップPC	19	33	14	18	21	17	20	30	-	19	31	21	28	30	14	-	16	9
個人利用	7	10	2	5	10	0	8	5	-	5	13	2	9	7	2	-	2	4
グループ利用	15	14	12	6	9	2	23	19	-	8	13	9	10	23	3	-	0	0
ノートPC台数	4	5	5	2	3	1	2	4	-	2	6	2	6	7	1	-	0	2

(2) 鳥取大学におけるラーニング・コモンズの意義とは？

ベネットは「ラーニング・コモンズが成功するか否かは、サポート・サービス部門（例えば図書館や大学のコンピュータ部門）との連携だけでなく、大学の教育目標の設定に関わる部門をどれだけ巻き込んでゆくかということにも掛かってくる」と述べ、ラーニング・コモンズが大学のミッションや教育目標と深い関連性を持つ必要を述べている (Bennett, 2008)。図書館が単独で設置している日本のほとんどのラーニング・コモンズにとって、これは大きな課題であるように思われるが、この点については鳥取大のラーニング・コモンズはどうだろうか。

鳥取大学では大学のミッションとして「知と実践の融合」「学生の人間力の養成」を掲げている。ただ知識を得るだけでなく、それを実社会の中で活かすことができる能力を持った学生の育成こそが鳥取大学の目標である。こうした学生の育成のために、他者とのコミュニケーションやディベート能力の涵養は必須のものである。こうした能力の育成にこれまでの図書館は直接的にはタッチしていなかったが、ラーニング・コモンズの設置は、今後はこうした面での学生の教育に図書館も関わってゆくことを目に見える形で表したものであり、この点からラーニング・コモンズは鳥取大学の教育目標とも関わっているということがいえる。

さらに附属図書館では現在、ロビーの展示コーナーで学生のサークル活動の成果発表の場をつくったり、図書館の蔵書の選書に学生を参加させる「ブックハンティング」などを行っている。学生に他の学生、教員、図書館職員などとコミュニケーションをとりつつ協働する様々な経験の機会を与え、それを通して学生を育成するという点で、こうした活動もラーニング・コモンズの考え方に通じるところがある。このようにラーニング・コモンズに示されたサービスの方向性を、図書館のサービス全体に拡大させ、学生の教育により深く関わることで、ラーニング・コモンズの設置がさらに大きな実を結ぶことになるといえる。今後そうした方向で、より一層の学生へのサービスの展開が求められると筆者は考える。

津村光洋 (鳥取大学附属図書館)

注：平成 20 年度の中央図書館の入館者統計によると、一月あたりの平均入館者数 33,594 人に対して、12 月の入館者数は 30,894 人であった。ちなみに、この年度で一月当たり最大の入館者数は 7 月の 62,927 人、最小は 8 月の 10,838 人。

<引用文献>

- 片山俊治訳（2008）「ラーニング・コモンズ：学生支援との連携」、『大学図書館研究』, vol. 83, pp. 6-10.
- 高阪一治（2010）「中央図書館の改修に思う」、『Library：鳥取大学附属図書館報』, no. 115/116, pp. 4-5.
- 杉本昌彦（2010）「多目的学習スペースの創設と学習支援：上智大学図書館の試み」、『LISN』, no. 144, pp. 11-15.
- 立石亜紀子（2010）「ラーニング・コモンズと横浜国立大学中央図書館：これまでとこれから」、『LISN』, vol. 144, pp. 6-10.
- 歳森敦（2010）「筑波大学図書館情報学図書館でのラーニング・コモンズ誕生：教育との連携による小規模モデルの試み」、『LISN』, no. 144, pp. 1-5.
- 鳥取大学附属図書館（2010）『鳥取大学附属図書館利用者アンケート報告書』,
<http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/metadata/3005>（2011年1月23日取得）.
- 茂出木理子（2008）「ラーニング・コモンズの可能性：魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ」、『情報の科学と技術』, vol. 58, no. 7, pp. 341-346.
- 山田政寛（2010）「ラーニング・コモンズにおける学習空間と学習支援を考える」、『LISN』, no. 144, pp. 20-23.
- 山根博（2009）「図書館の非電子的、来館型、人的サービス」、『Library：鳥取大学附属図書館報』, no. 113, pp. 4-5.
- Bennett, S. (2008) The information or the learning commons: Which will we have?, *Journal of Academic Librarianship*, vol. 34, no. 3, pp. 183-185.